2010 年度　司書部　夏期研修会

「公共図書館との協力、相互貸借を考える」

日時　：　８月 17 日（火曜日）
場所　：　大阪府立中央図書館
参加者：　５１名（府立３７　私学１０　支援学校１　衛星都市立２　その他１）

１．　内容の設定について

学校図書館として教科学習や学校行事へのバックアップは大切な仕事である。しかし、教科学習や学校行事へのきめ細かな支援をするためには、自分の高校の資料だけでは難しいことがよくある。そんな時、公共図書館との連携（相互貸借）についてどうしていけばいいのだろうか。実際に連携されている方々から具体的な様子を聞くことにする。

２．　実践報告

その１　高校への協力貸出（試行）をしてみて

発表　吉川逸子さん（大阪府立中央図書館）

高校への協力貸出は平成 20 年度末に 3 校から始まった。平成 21 年度には９校が参加、２０９３冊の利用があった。本年８月現在、当試行の対象校は１０校の高校である。

試行対象校の殆どは、府立中央図書館からの協力貸出を受ける前から地元の公共図書館で団体貸出をされていた。資料の搬送には今のところ地元の図書館の協力が不可欠なので、公共図書館との連携は重要である。利用の状況から、高校図書館は地元の図書館と府立中央図書館をうまく使い分けていると思う。府立中央図書館は「資料を収集、保存する」という役割があり、出版された本を「１冊」購入して、保存する。それに対して、地元の図書館は利用に応じて、複数冊購入したり、利用の多い分野の蔵書をたくさん揃えたりということがある。必要な資料を見極めて、それぞれの資料を借りているようだ。

貸し出されている資料を見ると、いま高校の図書館でどんなことが話題になっているのかがよくわかる。社会問題や話題になっている事柄などへの反応も早く、マイケル・ジャクソンの訃報が流れたときもすぐに関連資料に予約がかけられていた。しばらくすれば関連本も出版されるだろうし、これまでに出版されているものも増刷されるだろうけど、流通にのるまで待っていては“旬”を逃してしまうかもしれない。提供できるまでに時間がかかりそうなものや一過性のものでその後も続けて話題になるかどうかわからないものなどでは特に協力貸出を利用されているように思う。

協力貸出で本を借りるには、まず、高校図書館の担当者が「協力貸出ポータルサイト」にて必要な本の申し込み（予約）を行う。本は高校名の書かれたケースに入れて搬送される。予約された本は週に一度、各自治体の代表館に協力車がま

わっているので、それを利用して最寄りの協力車運行先公共図書館へ届けられる。高校図書館の担当者は当該の図書館へ出向き、予約の本を受け取る。返却の際には当該の図書館まで持っていけば、府立中央図書館まで届けられる仕組みになっている。貸出期間は３０日間（ただし他の利用者からの予約が無い場合は最長６０日まで延長可能）。冊数には制限なし。特定分野の資料に申し込みが集中してするなど、業務に支障が出る場合には協力振興課で調整することとなっている。予約した本は原則、地元の図書館まで受け取りに行くこととなっているが、往復の郵送料を高校図書館のほうで準備できるのなら、郵送や宅急便による搬送も可能かと思う。直接、府立中央図書館まで受け取りに来る方法もあると思うが、申し込みは「協力貸出ポータルサイト」にて予約の入力をしていただくことが条件となる。高校図書館の担当者に直接、書架から本を抜き出されるのは遠慮していただいている。一般利用者の中には、大変厳しいクレームを図書館に対しても、他の利用者に対しても、言ってくる方がいるので気をつけたいと思っている。また当初、協力貸出をするにあたって、同じテーマの資料への申し込みが集中するなどして棚が空になることが懸念されていたが、協力振興課で調整するということでやってきているので、館内の調整が取れなくなって非常に困ることにもなるのである。

協力貸出のポータルサイトからは登録校向けに調査相談（レファレンスサービス）を行っている。マイブックリストといって、借りた本のリストを作ることもできる。マイブックリストでは１０テーマ・各１００冊のリストが作れ、自分でコメントを書き込むことができるようになっている。これらのサービスは高校図書館向けの項目もあるが、基本的な部分は個人向けのものと同じである。府立図書館利用者カードの番号とパスワードの登録さえあれば、大阪府立図書館のＷｅｂサイトから、個人向けのｅ－レファレンスサービスが利用できるので、協力貸出の登録校でなくても使ってもらいたい。

大阪府立図書館では４月１日から民間事業者（図書館流通センター(TRC)）との協働による業務運営が始まっている。協力貸出の業務もその分野に含まれていて、申し込みのあった本をケースにつめて最寄りの公共図書館に送る作業は民間事業者が行っている。大きなトラブルは今のところ少ないが、督促や搬送の際の間違いなども民間事業者が処理している。どんな資料が動いているのか、各館の利用動向はどうか、等現場にいないために実態を把握しにくくなってきている。情報収集のためのアンテナが鈍くなってしまったように感じる。

現在、当試行のための予算がまったくないために、「試行」として少しずつ運用するしかない状況がある。また、すべての公共図書館が積極的に協力貸出を行いたいと思っているとは限らない。協力貸出を行いたいと思っている高校図書館と協力してくれる地元の図書館とのマッチングは難しいけれど、大切な作業である。府立中央図書館、地元の公共図書館、高校図書館の三者による事前調整を十分に行いながら、これからも協力貸出をすすめていきたいと思う。

＜質疑応答＞

質問①
協力貸出の申し込み書類はどこで手に入るか。
回答①
高校への協力貸出の手続きは協力館・府立中央図書館・学校の三者の調整が必要なので、最初に書類を渡すのではなく調整が済んでから書類を渡す形式を取っている。まず、高校から協力館となる公共図書館に働きかけをして欲しい。

質問②
協力貸出を行っているサイトのマイブックリストや e-レファレンスは協力貸出を行っていない学校でも使えるのか。
回答②
マイブックリストを作るページや e-レファレンスは時間や予算の関係上、市町村図書館向けの協力貸出ポータルサイトのページを使用している。権限がうまく整理できていないので、協力貸出をしていない高校向けにはできていない。今のところは、個人登録で使えるマイブックリスト等を利用して欲しい。

質問③
冊数制限がないようだが、どのくらいの貸出が可能か
回答③
貸出用の箱には３０冊くらいは入るが、その中に 2 冊だけということもある。多いときには 5 箱、６箱になることもあるが、それでも貸出は可能。冊数については気にしてもらわなくてよい。

質問④
試行でされている１０校の市町村にある学校は、協力貸出をお願いしやすいのではないか？市町村を教えて欲しい。
回答④
四條畷市・交野市・和泉市・八尾市・松原市・門真市

質問⑤
学校は大阪市の東淀川区にある。この場合、協力館は大阪市なのか東淀川になるのか。
回答⑤
搬送は市町村の代表館にしか行っていない。本館から分館への搬送については市町村の予算になるので、府立中央図書館から要請はできない。また大阪市には協力館としては関係がまだできていない。府立中央図書館から大阪市の中央図書館に協力館をお願いしてみるのは可能だが、大阪市立中央図書館から各分館への搬送具合はわからないし、立ち入られる事ではない。

質問⑥

いきなり高校が地元の公共図書館に協力館要請に行っても、うまく説明できずに門前払いの可能性がある。府立中央図書館からはサポートはあるのか。
また、学校から公共図書館にお願いに行くのに、府立中央図書館はこういうサービスをしているという簡単な案内書があるとありがたい。
回答⑥
府立中央図書館からも協力館要請は行っている。府立図書館から市町村立図書館へ声をかけてみる事もできるし、協力する旨連絡があった市もあるので、まず府立中央図書館へ連絡してもらうのも一法である。
一枚物の案内書については検討する。

質問⑦（要望、意見として）
各高校図書館のほうで搬送費が準備できるのなら、郵送や宅急便による搬送も可能かと思うという話があったが、各学校で予算を計上するためにはそういったことをきちんとしめして欲しい。
協力貸出のシステムを一枚物の案内書にしたものができれば研究会のホームページに載せることも可能だと考える。

その２　府立中央図書館と高校図書館をつないで

発表　佐藤栄子さん（和泉市にじのとしょかん）

和泉市の図書館は分館を含め 4 館あり、にじのとしょかんは和泉市立人権文化センターの中にある図書館である。蔵書は一般書が約 2 万冊、児童書が約 2 万冊、年間貸出冊数は約 10 万冊である。

にじのとしょかんでは、せっかくある本はたくさん利用してもらいたいと思っている。そのためには利用者を図書館で待っているだけではダメだと思い、図書館から利用者に働きかけた。にじのとしょかんは和泉市の図書館ではあるけれども、他の図書館とは予算が違う。小さい図書館ではあるが、小回りがきくという利点を活かして、いろんな団体に本の配送サービスを行っている。毎週木曜日に巡回し、貸出の本を渡し、返却の本を受け取る。信太高校にも本を配送している。信太高校への貸出は年間１２００冊あまり。絵本の読みあいのときには 100 冊単位で貸出した。信太高校に貸出をするようになって、貸出数は増大した。府立中央図書館からの本も配送サービスで運んでいる。

府立中央図書館の信太高校への協力貸出は、高校生と公共図書館をつなぐきっかけになっている。中学・高校生の公共図書館の利用は他の年代に比べて低く、図書館に呼び込むことが難しい。しかし、高校と交流することによって、直接ではないけれども高校生との間を取り持つことができたと思っている。高校の図書館で、いろんな公共図書館から借りられた本を利用したことがきっかけとなり、公共図書館に来て利用登録する高校生もあった。絵本の読みあいボランティアに参加するなど、高校生がボランティアとして図書館事業にもかかわっている。ま

た、リクエストによってたくさんの本が動くし、市外の公共図書館から借りた多様な本をみることで、カウンターは情報収集の場となった。本の情報だけでなく、アイデアを得る場にもなっている。11 月に行われる絵本ひろば「書庫の絵本を読もう！！」のためには面展台をたくさん作ることができた。

和泉市の図書館も、和泉図書館（平成 23 年春・JR 和泉府中駅前に移転予定）とシティプラザ図書館で指定管理者制となる。予算も縮小され、これからの図書館行政への不安は増すばかりである。自動貸出機を利用することもあり、ＩＣチップが導入されることになるが、にじのとしょかんとしては、蔵書管理にも貸出業務にもＩＣチップがそれほど必要になるとは思えない。ＩＣチップを利用した自動貸出機は早くて便利なのかもしれないが、図書館には人にしかできないこと、公でなければできないことがたくさんあると思う。小さい図書館ならではのサービスをこれからも続けていきたいと思っている。

＜感想より＞

・ 学校と公共施設をつなぐ地域の図書館の存在は大きく、そこで一冊でも多く、一人でも多く図書館の利用者を増やし、内容がより深くニーズにあったものにしようとしている「理想を求めている姿」が伝わってきて力強く感じました。
・ 公共図書館がどのように協力貸出をとらえておられるのかわかって良かったです。お世話になるばかりだと気がひけるが、公共にとってもメリットを教えてもらえてよかった。
・ 小さな図書館だからことの温かみを感じた。図書館がつながっていくことの大事さもよくわかった。
・ 学校司書が生徒に働きかけることで公共図書館の利用者も増えているとの事。もっと生徒に働きかけたいと思います。公共と学校の連携、素晴らしいですね。

その３　相互貸借の中から見えてきたこと

発表　山本真由美さん（大阪府立交野高等学校）

交野市立図書館との連携は交野高校に赴任してすぐの４月に始めた。それは、本校の蔵書が古くなっていたことと生徒の興味とずれているのではないかと思ったことと予算が少なかったからである。すぐに交野市立図書館へ管理職とともに挨拶に行き、団体貸出を申し込んだ。公共図書館によって違いはあるが、一回に利用できる冊数は団体の構成員×１０冊まで、貸出期限は １ ヶ月（継続手続きも可）である。

公共図書館の蔵書はいろんな分野にわたって種類が多く、新しい本もたくさんある。日本の小説、海外のもの、ビジュアル本、お菓子や手芸・雑貨などの実用書など、「見るときれいで興味がわく」本をどんどん選んでテーマ展示を行った。新しい本やきれいな本をたくさん並べることによって、図書館の本がきれいに見

える。予算が少なくてもリクエストに応えることができた。本を見せることで図書館をアピールしていった。公共図書館から借りている本が破損したり、紛失したりなどのトラブルはいくつか考えられたが、それは自館の本がなくなっても同じだし、府費で対応すればいいと思っている。個人への貸出でもテーマ展示でも、本の動きは見えるので、今のところトラブルはほとんど起きていない。資料を大切に扱ってくれるかどうかは利用者との信頼関係でもある。図書館が役に立つと思ってくれればそんなにトラブルは起きないだろうと思う。

公共図書館の蔵書構成では授業等教材研究などは資料が足りないということもあった。交野図書館を経由して、市外の公共図書館の本（府立中央図書館の本もある）も借りていたが、貸出期限が経由する時間的な問題で短くなってしまう。そんなときには府立図書館の本が直接使えるようになればいいのにと思っていた。昨年度より、府立中央図書館の協力貸出ができるようになって、専門資料を使える量がぐっと増えた。e-レファレンスを利用して高度なレファレンスにも対応できた。他館を経由しないので貸出期間も長くなり、教科の参考資料やテーマ展示の資料の幅を広げることができた。

本を借りるときには、交野市の図書館、府立中央図書館の得意分野を使い分けるようにしている。通常、自館の蔵書にはなくて購入する予定がない本を公共図書館から借りるが、ライトノベルなどシリーズもので途中の巻だけのリクエストとか、自館にもその分野の本はあるんだけれど、そんなにはたくさん買えない趣味や実用書などは交野市立図書館にお願いする。府立中央図書館には古い本で手に入らないものや専門書、高価なビジュアル本などをお願いすることが多い。府立中央図書館は高価な本や大きさに関わらず本を貸してくれ、資料提供が潤沢にできた。予約した本はたいていが 1 週間以内に手元に届く。公共図書館と連携することで、利用者の利便性は向上した。どんなリクエストにも対応できるので、余裕をもって、そして自信をもって資料提供ができるようになった。

司書の仕事として選書の参考にさせてもらうことも多い。書架を見れば実物を見ることができる。どんな本があるか、この種類の本なら自館でも使えるか、なにより図書館員によってセレクトされた本を見ることができるので大いに参考になる。蔵書データを検索して利用するときも、データだけではわからないときにはその本を取り寄せて見ることができる。公共図書館で司書の方々とやりとりする中で、レファレンスや利用者との対応を学ぶこともたくさんあった。

相互貸借する上では、高校図書館同士の連携がもっとも重要だと思う。高校生が使う資料を求めるなら、他の高校図書館の資料は非常に役に立つからである。高校間で本がやり取りできればもっと充実した資料提供ができるのにと思う。しかし、資料の運搬手段が確保されていない現状でそれは難しい。また、図書館担当者の問題もある。蔵書を構成するときに、日常的な活動の中での資料選択はかかせない。相互貸借をするにも選書をするにも定点になる人、支点になる人が図書館には絶対必要である。専任の図書館担当者がいなくなれば、時間的に余裕もなくなり、どこまで利用者に資料提供できるのだろうか。高校の図書館がどうなっていくのか気がかりである。これからもいろんな図書館と手をつなぎながら、

たくさんの人に図書館について理解してもらいたいと思っている。

＜質疑応答＞
質問①
自館はバーコードだと思うが、他館からの本はどうやって管理しているのか。
回答①
交野高校はバーコード化していないので、自館と同じようにブックカードを作り貸出を行っている。他校の話では、臨時の番号でバーコードを作成したり、また府立高校の図書システムは基本的に１２桁だとそのまま使う事が可能なようなので、府立高校間同士だとバーコードをそのまま使う事ができるそうだ。

質問②
どういう時間に借りにいっているのか。
回答②
府立図書館から協力館に本が届く金曜日をベースに動いている。基本的には、出張として勤務時間内に自転車で行っているが、受け取りだけの場合は図書係の先生にお願いすることもある。量が多い場合は、臨時車使用願いを申請して車で受け取りに行くこともある。

３．　実演

絵本の読み聞かせと絵本の読みあい

実演　井辺清子さん（大阪府立信太高等学校）

絵本の読み方にはいろいろあるが、だれかと読む、だれかに読むときの方法として、「読みきかせ」と「ひろば読み」というのがある。

静かにストーリーを伝えたい。そんな時は「読みきかせ」をするとよいと思う。例えば、オリエンテーションの時。中廊下の学校が多いし、授業の時間をもらっているのでワイワイ、ガヤガヤではちょっと気を使う。そんな時には読みきかせをしている。（個人的な感覚かもしれませんが…とのこと）

「読み聞かせ」に使った絵本

『おおきな木』　シェル・シルヴァスタイン　篠崎書林
『あらしのよるに』　木村 裕一／あべ 弘士　講談社
『世界で一番の贈りもの』

マイケル モーパーゴ／マイケル フォアマン　評論社
『賢者のおくりもの』　オー・ヘンリー／リスベート・ツヴェルガー　富山房
『戦争で死んだ兵士のこと』　小泉 吉宏　ベネッセコーポレーション
『わたし いややねん』　吉村 敬子／まつした 香住　偕成社
この本は短い話なので、一斉にだけではなく昼休みにもよく読んでいる。
『ポストマン』　村上　龍／はまの　ゆか　日本放送出版協会

「読みきかせ」に対して、「ひろば読み」というのは“えほんひろば”などで少人数の“よみあい”をして絵本を楽しむ読み方である。一方的に読み聞かせるのではなく、一緒に絵本を楽しむものである。参加型、じらし読み、文字を読まないで絵を読むなど、読み方にもいろいろあり、短い絵本をどんどん一緒に読んでいく。絵本の楽しみ方を伝える方法ともいえる。

ひろば読みの風景

「ひろば読み」で人気の本

『どんどんきいて！』　アンティエ・ダム　小学館
コミュニケーションをとるには最適、特に初対面の人と。
『りんごです』　川端　誠　文化出版局
『バナナです』　川端　誠　文化出版局
『いちごです』　川端　誠　文化出版局
“えほん”はフカーイです。年齢にあった読み方ができる。
『みんな おなじ でも みんな ちがう』　奥井一満　福音館書店　**参加型**
『おいしいね』　吉村　竹彦　佼成出版社　**参加型**
『ねこ ねてる』　田島　征三　福音館書店　**参加型**
『うしはどこでも「モ～！」』
エレン・スラスキー・ワインスティーン　鈴木出版　**参加型**
『だるまさんが』　かがくい ひろし　ブロンズ新社　**参加型**
『だるまさんと』　かがくい ひろし　ブロンズ新社　**参加型**
『だるまさんの』　かがくい ひろし　ブロンズ新社　**参加型**
『まめうし　あいうえお』　あきやま　ただし　ＰＨＰ出版　**参加型**
絶対失敗しません!!
『ふしぎなナイフ』　中村牧江 林健造　福音館書店　**覗き見読み**
『くるまのねだんのえほん』　くもん出版　**覗き見読み**
『はじめてのおつかい』　筒井 頼子／林　明子　福音館書店　**絵を読む**
『旅の絵本』　安野 光雅　福音館書店　**絵を読む**
『かまきりっこ』　近藤 薫美子　アリス館
『のにっき―野日記』　近藤 薫美子　アリス館
詳細な描写で書かれている。

『だめよ、デイビッド！』　デイビッド・シャノン　評論社

絵を読んで楽しむ

『１００ぴきのいぬ　１００のなまえ』
　　チンルン・リー　フレーベル館
『光の旅　かげの旅』　アン・ジョナス　評論社
『あらまっ！』　ケイト ラム　小学館
『Ｐapa！　パパーッ！』　フリップ・コランタン　ポプラ社

＜感想より＞

・ 高校生からみた絵本とのかかわりが解かりやすく紹介していただきよかった。
・ 感情を入れてすごく上手に絵本を読まれていて感動しました。絵本を入れることに高校生のほうが「えーっ」とか「何で絵本を入れるの？」とかいわれるのですが、絵本の大切さを痛感しました。
・ 絵本のよさを再発見できました。自分の学校でどれだけ活かせることができるかが課題ですが。
・ 自分でも興味をもっているが、全く手付かずの取組みだった。次年度以降、ガイダンスなどに取り入れられたら、と思うので参考になった。
・ 読みあいにもいろんな種類があることを知りました。大人でも完全に絵本の中に入り込んでいる自分にびっくりしました。

４．　見学

大阪府立中央図書館　及び　児童文学館　見学

　午後は全体を二つの班に分け、前半と後半で実演と見学を交代し、「絵本の読み聞かせと絵本の読みあい」と「大阪府立中央図書館及び児童文学館の見学」を行った。

＜見学コース＞

２階カウンター ⇒ １階 障がい者支援室（対面朗読室など） ⇒ １階 小説・読み物室 ⇒ １階 子ども資料室 ⇒ １階 国際児童文学館 ⇒ 地階 書庫

＜感想より＞

・ 児童文学館の蔵書を全部受け入れるのは、施設上困難なことも多いと思いました。書庫の自転車にも驚きました。
・ 書庫が地下一杯にひろがり、吸い込まれそうに感じました。図書の末端の業務が委託になっていることで、図書館は確かに業務の分業がされているよう

に感じました。同時に何か失われつつあるのも感じました。
・ 以前の児童文学館のオモチャ箱のような、ワクワクドキドキの図書館がなつかしいです。残念です。
・ 中央図書館のカウンターにガードマンかと見まがう方々がいるのはかなり違和感がありました。カウンターはいちばん大切な業務なのに、これでは単なる「作業」の様で図書館が活きてこない気がします。再考していただきたいです！本当にこれらの貴重な資料が活きて利用されるような施策を望みます！！

５． まとめ

昨年度は、教科とどのように連携すればいいのか、また図書館としてどんな支援ができるかについて考えた。今年度は、資料を相互貸借することについて考えるために、実際に協力貸出を行っている、大阪府立中央図書館の担当者、市立図書館の担当者、府立高校の司書の方々から具体的な実践をうかがった。自信をもって利用者に対応し、公共図書館と連携していろんな資料提供やレファレンスを行うには、公共図書館にも学校図書館にも専任の司書が必要である。形式だけのものでないシステムとして定着されればと思う。

これからも司書の専門性へとつながる実践からたくさんのことを学び、図書館活動活性化の方法を探っていきたいと思う。